



# 「鹿児島市+川内市」分の電力を1施設で消費!? 巨大データセンター計画、循環型拠点との矛盾も

薩摩川内市川内港背後地に、国内最大規模となるAI向けデータセンターの建設計画が進んでいます。稼働率50%でも、鹿児島市と薩摩川内市すべての家庭に相当する年間33万世帯分の電力を消費すると試算されます。さらに、その電力の半分が冷却に使われることで、川内川への温排水放流が予想され、「サーキュラーパーク九州」という循環型産業拠点との矛盾が指摘されています。いまこそ市民的な議論が必要です。



写真は、国内でも最大級の電力供給能力を誇るハイパースケール向けデータセンター「TOK1」の建設予想図。(千葉県印西市)。

## 年間電力は「33万世帯分」 稼働率50%でも巨大規模

計画されているデータセンターは最大受電容量350メガワット。仮に稼働率を50%としても、1年間で約1.53テラワット時(TWh)の電力を消費します。これは、1世帯あたり年間4,600kWhを使用すると仮定した場合、約33万世帯分に相当。鹿児島市(約28万世帯)と薩摩川内市(約4万世帯)を合わせた規模と同等です。

## 冷却に川内川の水? 温排水の環境への影響も

データセンターの電力消費のうち30~50%は冷却に使われます。冷却水に川内川の水を用いた場合、大量の温排水が発生し、川内川の水温上昇や生態系への影響が懸念されます。

こちらくらの相談所  
(No. 626)  
携帯 080-3996-0237 (井上)  
なんでもご相談ください。

「景観も悪い」とご近所から苦情が寄せられていました。調べたところ、教頭先生は実際にはこの住宅に住んでおらず、空き家状態でした。そのため個人に管理を任せるのは難しいと考え、市に管理を要望しました。

市民の声が届くことで、市が対応し、環境改善につながりました。今後も空き家の管理など、行政の責任が問われる課題として取り組みを続けていきます。

## 循環型産業拠点と両立する のかー市民的な検証を

このデータセンター計画は「サーキュラーパーク九州」内に設置される予定です。資源の循環と再利用を掲げる拠点に、電力大量消費・大量排熱の施設を設置することが、本来の理念に合致するのかが、事前の環境影響評価や住民説明、公共水利用の許認可手続きが適切に行われているか、丁寧な検証が求められます。

特に夏場などは酸素量の低下や魚類への悪影響、水田用水への波及も否定できません。川内原発においても温排水による環境負荷が長年問題となっており、新たに巨大データセンターからの排熱が加わることになれば、地域環境への影響は計り知れません。

## データセンター もう一つの問題点 莫大な補助金の支出も

(2面へ続く)

# データセンターももう一つの問題点 莫大な補助金の支出も

膨大な電力消費と環境への影響に加えて、市や県、国からの巨額の補助金支出が見込まれていることにも懸念の声が上がっています。市民の税金が、地元雇用や産業連携をほとんどもたらさない外資系企業に使われようとしているのではないかと、私たちに冷静な検証が求められています。

## 最大で数十億円？ 国・県・市の「三位一体補助」も視野か

現在進行中のデータセンター計画は、台湾系金融企業と日本企業の共同出資による新法人によって運営される予定であり、企業誘致の一環として、鹿児島県や薩摩川内市の補助金制度の活用が検討されているとみられます。

過去の大規模立地事例では、国の「デジタル田園都市国家構想交付金」や県の「企業立地促進補助金」、そして市の独自支援を組み合わせて、1件あたり30〜50億円規模の公的

資金が投入された例もあります。

## 地元雇用は少数、電力は大量 見合う支援なのか？

データセンターは、建物自体は巨大でも実際の雇用は非常に限定的で、数十人〜百人程度にとどまることが一般的です。一方で、施設全体で年間1・5テラワット時(TWh)にのぼる電力を消費するとみられ、これは鹿児島市と薩摩川内市の全家庭の

年間消費電力に匹敵する規模です。このような「電力集約・雇用希薄」な産業に対して、市民の貴重な税金を投入することが、地域経済の発展や循環型産業との整合性に本当にかなっているのか―議会としても市民としても検証が求められます。

## 市民への説明責任を果たすべき

現時点で、企業による説明は市長と県知事への個別説明にとどまっています。市民説明会や住民参加の場は設けられていません。

このまま進めば、「巨額の補助金が密室で決まり、地域住民には環境リスクと高電力負担だけが押しつけられる」ことになりかねません。

### 6つの顔 (2025)

日本の伝統芸能である狂言。能や歌舞伎のような音楽はなく、セリフと動きのみ。私は知識はほとんどありませんが、独特の言い回しや妙な動きがなんともユーモラスです。たまにZEXXのモニターで放送されますね。その人間国宝・野村万作、94歳。芸歴90年の歩みと現在、そして、息子・野村萬齋と演じる狂言「川上」を、舞台の間近にみるような映し方でまるごと収めた異色のドキュメンタリーです。「六つの顔」とは野村万作の心に刻まれた顔。その夜、ある夢をみます。

これは、祖父・野村萬齋、父・野村万蔵、弟・野村万之介、少年時代の自分自身、そして自身が演じた狐と猿。その忘れ得ぬ出来事を語ります。過去はアニメーション、現在はモノクロ、「川上」がカラーという構成。測ってはいませんが、この「川上」、30分以上あったと思います。盲目の男(野村万作)が、参ると願いが叶うといわれる奈良・吉野の川上というところにある地蔵を参拝し、目が見えるようにと願います。地蔵堂に泊まったその夜、ある夢をみます。

すると翌日、目が見えるようになるのです。杖も捨て、喜び勇んで妻が待つ自宅へ帰るのですが、夢にあらわれた地蔵が目の回復と引換えに条件を付けていて、それは妻と離別することなのです。仲の良い夫婦なのに。窮地に立った男。どうするか。数日間の上映が多いガーデンズシネマですが、1カ月上映されました。さて気になる次の映画は、「揺さぶられる正義」(10月15日、ガーデンズシネマ)です。

No. 55



シネマ太郎の映画評と案内



6つの顔



揺さぶられる正義



←中俣先生のブログはこちら

## 中俣先生のつれづれなるままに (809)



上田精一さんが亡くなったと書いても、さきさきと読者のみなさまには知らない人が多いでしょう。その知らない人のこと、しばらく付き合ってください。私にとっては、元県作文の会会長の茂山さんとともに、忘れてはならない恩師です。私が党に入ったのが1987年、43歳のときでした。そのときはもう、これで世間の付き合いが狭くなり、自由もなくなるぞと、心配で心配でならなかったものです。しかしそれは全くの杞憂でした。その翌88年の佐賀九民研で早速声がかかりました。「中俣くん、エミール社の社長が、君に会いたがっているよ」。その人こそ上田さんでした。「教育はロマン」という著者にずっとあこがれていたのですが、その人が私の前に立ったのです。私の目の前がパッと開け、大空に飛びたつ思いでした。エミール社は本の出版の話でした。1990年には父が亡くなり、一週間の休暇があったので『行き場がない』の清書に取り掛かり、翌年の91年4月に本は発行されました。これが「先生！行き場がない」という本となったのです。友人の佐土原さんは「中俣さんは彗星のごとくこの世に現れた」と、当時の私のことを言ったものです。党に入るとは世界が広がり、広がった世界を自由に飛び回ることだと、そのとき思いました。その後『蟹工船』の本まで、合わせて4冊の本すべてに上田さんがいます。本当にかけがえのない人を見失ったものよと、今、しみみり沈む思いです。(児童クラブ支援員)